

あとがき

今回は山口長男作品集が講談社から刊行されたのを機会に山口長男さんの最近の作品を中心に展覧会を催すこととなった。御高覧いただきたい。

さて、画集が刊行されるに当たって、その関係者として二、三感想を申し述べておきたい。

画集刊行のために山口長男画集刊行会なるものを作ろうという話が具体的になったのは昭和54年夏頃で、ぼくの記録によると9月23日にメンバーである山口長男、石橋輝男、内田芳孝、そして小生の4人が初めて打合せを行っている。この画集の出来上ってくる過程については内田芳孝「山口長男レゾネノート」をお読みいただくと明らかであり特につけ加える余地はないのであるが、とにもかくにも画集ができ上がったことでホッとしている。この画集完成を機に、山口長男先生の益々のご健勝を祈りたい。

今度の山口長男作品集が山口さんの初めての本格的な画集であるということは、考えてみると不思議な話である。展覧会カタログとしては北九州市美術館。東京国立近代美術館(これは堀内正和さんとの2人展)から立派なカタログが刊行されている。しかし画集としては今回が初めてというのは、わが国現代美術の状況の一面を示すものとみてよいであろう。

次にこの画集が単なる画集ではなく同時にカタログレゾネ(全作品目録)を目指して出発し、現時点で出来得る限りの努力した成果がここに示されている。わが国の現代美術を代表する一人の作家のカタログレゾネ——完全ではないにしても——が出来上ったのは画期的なことではないか、と秘かに思っている。

この画集刊行に当っては非常に多くの人々のご協力を得た。ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げる次第である。と同時に、この画集刊行の最大のプロモーターであった内田芳孝さんに敬意を表したい。彼の山口長男さんの画集を作ろうとする強い意志と逞ましい行動力がなかったら、この画集はできなかつたであろう。全国各地に散在する作品を見つけ出し、写真を撮るという仕事はしかるべき対価を払えば出来るという安易なものではない。一種使命感を帯びた無償の行為である。敬意を表する所以である。

最後に出版をお引受けいただいた講談社、第一出版の関係各位に厚く御礼申し上げたい。出版サイドからすると現状ではムツカシイ本を出版にふみ切っていただいたことに感謝している。

ところで、画集が出来上って一冊、まずどこへもって挨拶に伺うか、ということになると、ぼくは亡くなった志水楠男さんのところである。なんとならば、それがもっともふさわしく自然なことだから。

1981年6月15日 佐谷画廊 佐谷和彦